

# 10

process in  
architecture exhibition

—— これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35（以下、本展）を通じたこれからの建築展のあり方と、U-35 の存在を考察する。



## 「10 会議」の発足

約 10 年前、U-30 として開催を始めた本展は、世界の第一線で活躍する巨匠建築家と、出展者の一世代上の建築家と議論し、あらたな建築の価値を批評し共有するために召集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として、全国の地方区分で影響力を持ちはじめ新たな活動をされていた建築家・史家である。東より、北海道の五十嵐淳をはじめ、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壮介、関西の平沼孝啓、そして中国地方の三分一博志や、九州地方の塩塚隆生など、中部と四国を除いた、日本の 6 地方から集まった。開催初年度には、三分一、塩塚など 1960 年代生まれの建築家も登壇し、開催を重ねるごとに 1970 年代生まれの建築家が中心となる。3 年後の 2012 年の開催より、この 8 人の建築家(五十嵐淳、石上純也、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、2013 年より、芦澤竜一、吉村靖孝)と 2 人の建築史家(五十嵐太郎、倉方俊介)による開催を隔年で重ねることとなる。そもそもこの展覧会を起した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約 10 年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下の出展者である新時代を考察するような仕組みとなるよう試みたのだが、この 10 名が集まった時期に、藤本が「この建築展は、我らの世代で見守り続け、俺らの世代で建築のあり方を変える」という発言から、本展を見守り続けるメンバーが位置づけられていった。そして同時期に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出展した若手建築家との出会うのは開催前年度の 2009 年。長きにわたり、大学で教鞭を執る建築家たちによる候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりであった全国の若手建築家のアトリエ、もしくは自宅に向き、27 組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆等を代表する出展者 7 組を選出した。その翌年の選出はこの前年の出展者の約半数を指名で残しながら、自薦による公募を開始するものの、他薦による出展候補者の選考も併用する。はじめて開始した公募による選考は、本開催のオーガナイズを務める平沼が担当し、応募少数であったことから、書類審査による一次選考と、面接による二次選考による二段階審査方式であった。また海外からの応募もあったことから 2011 年の出展を果たした、デンマーク在住の応募者、加藤+ヴィクトリアの面接は、平沼の欧州出張中にフィンランドで実施された。また、他薦によるものは、塚本由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり 1 年目は完全指名、2 年目の 2011 年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アーキテクトによる他薦を併用していた。そして、現在の完全公募によるプログラムを実施したのは、開催 5 年目の 2014 年である。完全公募による審査をはじめた初代・審査委員長を務めた石上が、自らの年齢に近づけ対等な議論が交わせるようにと、展覧会の主題であった U-30 を、U-35 として出展者の年齢を 5 歳上げた時期であり、それから今年の開催で 5 年が経つ。また、この主題の変更に

合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、完全公募による選考と出展者の年齢が 35 歳以下となった翌年の開催である 2015 年。つまり公募開催第 2 回目の審査委員長を務めた藤本が、初めてのゴールドメダル授与設定に対し、「受賞該当者なし」と評した結果は記憶に新しい。これが大きく景気付けられ、翌年には伊東豊雄自らが選出することによる「伊東賞」が、隔年で設定するアワードとして追加され、それぞれの副賞に翌年の出展者としてシード権を与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの出展年齢もそうだが、プログラムが徐々にコンポジットし変化し続けているのが、本展のあり方ようだ。そして本展は来年の開催で 10 年目を迎える。

この出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共に位置づけてきたシンポジウムのメンバー 10 名が一同に揃った昨年の開催後に場を設け、開催 10 年目を迎える今後の U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、今年度より第 1 回目の開催を、今年の審査委員を務めた五十嵐太郎と、来年、2018 年開催の審査委員長を務める平田を中心に発足することとなった。

—— 皆さま、本日は長時間にわたりお疲れさまでした。8 年目の U352017 記念シンポジウムをただ今終了させていただきました。冒頭にこの会議発足の意図をお伝えしましたように、折角、皆さま一同がお集まりいただいていますので、本展の在り方を議論させていただく場を設定させていただきました。早速今年の出展者を振り返り、印象をお聞かせください。まずは公募の審査から GOLD MEDAL 賞の審査委員長を務められた、五十嵐太郎様よりお願い致します。



五十嵐太郎：本日は皆さんお疲れさまでした。今回はじめて完全公募による出展候補者の選考をしたのですが、たいへん難しいものですね。これまで出会ったこともない設計者も多く含むものから、自薦による応募用紙に記載されている事項を鵜呑みにしてしまいます。特に独立前の前職で担当されたプロジェクトをポートレートに掲載して提出されてくる場合は、主な担当者だったのかどうか、チームのメンバー数や事務所での役割などを明記してくれるといいのですが、自作のように作品を記載されてしまう場合があり、力量を測るときに誤認してしまいます。学生のポートフォリオでも共同で提出したアイデア・コンペをそのように掲載しがちですが、見極めが難しいと思いました。

展示は、それぞれの出展者が作品をただ持ち寄り、ばらばら表現するだけでなく、フォントを揃えたり、共通のパネルを設け、美術展の学芸員のように、ライターの方に、出展作品の解説を掲載してもらおう等、一般の来場者への説明や全体の統一感も考えた仕掛けができればいいなと思っています。今回の出展者が決定した時点で、出展者へ相談をしてみたのですが、やっぱり最後は自分が出すもので精一杯だったようです。それからゴールドメダル賞を選考する際には、正直、実作でないとしづらい。今回のケースだと、展示の多様性を出すために、ナノメートルアーキテクチャーを出展者の選考時点で見ましたが、計画なので Gold Medal の可能性は薄い。逆にもっと大胆で、とんでもない発想があったら、実現したプロジェクトでなくても、逆に Gold Medal を出せるのかもしれないけれど。つまり、どうしても見学した実作から絞り込みを始める。したがって、三井さん、千種さん、齋藤さんの 3 人の実作から選出することになりました。

倉方：その通りですね。出展作それぞれはバリエーションの幅が広く、個性豊かで違ったものが選ばれていました。私は 4 月の出展者説明会の座談会でポートフォリオを見て、五十嵐さんらしい選考だと感じました。客観的な目線から、課題や議論になるものが選ばれていて、充実しています。ただ、展示手法の面白さで言うと、過去の展覧会の方が会場での見せ方のバリエーションがあったように思います。それらと比べると、今年は展示手法の可能性の追求みたいなのが物足りなかった。作品としてのバリエーションの豊かさが、展示としては表現されていなくて、こう来るか、といった意外性のある展示が少なかった印象があります。

芦澤：公募では、展覧会へ出展される作品がダイレクトに提案されてくるんじゃないかと、ポートフォリオだけが提出されてくるのですか？そして公募により応募されたのは、今年はどれくらいの方がおられましたか？

五十嵐太郎：ポートフォリオと展示プランの両方の提出があります。今年は昨年のゴールドメダル、

伊東賞の授賞者など、前回からのシード組が2名いましたので、僕が選んだ5組とあわせて7組が参加しました。そして今年は50名弱の47名の応募でした。

芦澤：なるほど。若手が出していく環境づくりというか、もう少し集まる良い意味の仕掛けがあるといいのかもしれないね。

谷尻：このU35の応募はもっと集まりそうじゃないですか？誰でしたっけ？確か昨年でしたか？展覧会に参加をした出展者が、来場の方へ説明をしていたらそのまま、建築の相談がはじまり、クライアントになられたということがありましたね。こんなストーリーを出展者自ら発信してもらえたりすると、後世の応募者への可能性や動機を高められる場になっていくように思います。

倉方：確かに。それは僕らにも全てが伝わってないですね。もっとプレスしてもらった方が良くと思いますが、実際は出展したことによって、獲得したきっかけがもっと多くありそうです。

平沼：そうですね。U30の頃にも報告を聞いたことがありますが、結果としてクライアントとなる方との出会いの場となることは多いでしょう。そのようなきっかけがあるのも展覧会を開催し、出展する醍醐味なのかもしれません。ただ完成したプロジェクトを紹介したり、つくり方を話すことはあっても、依頼主との出会いの場を話す機会が少ないものです。また応募された時点では、独立といっても孤立した状態で、属に言うフリーランスだった方が、きちんとした設計事務所をつくり、所員を雇ったことを報告してくれたり、結婚を決意し子どもをつくることを聞かせてくれたり（笑）、出展がひとつの分岐点になっている私的な状況の変化を感じます。昨年から、展覧会を継続的に支援してくれる企業や団体の方たちや、出展者にも賛同してもらって開催期間中にギャラリー・イベント・トークというものを展覧会会場で毎日実施することになりました。当初の目的は、展覧会という文化事業に深い理解をされる方たちに会場に来てもらう目標でしたが、このイベントに参加された企業の方から僕だけでも4-5件。出展作に興味をもたれて紹介してほしいというものがあったり、若手の建築家を紹介してほしい、という依頼として主催者側へ問い合わせがあるようです。もちろん相談レベルのものから始まるのですが、指名コンペとしての実施や実施に向けたプロジェクトが始動した報告を受けています。だから、会期中はできるだけ会場に居てもらうように話しています。

谷尻：なるほど。一般者や設計じゃない建築従事者にはわかりづらい作品展示であるから、勝手に観てダイレクトに依頼の連絡をすることはない。つまりは展覧会なんだから期間中はできるだけ在廊しないよね。そして会期中には每晚、ギャラリーでイブニング・レクチャーが開催されていたり、

出展の裏側には、建築家にとって最高の舞台が用意されている。

五十嵐淳：出展者の人によりけりだけど、勤が働く人たちはわかりますね。（笑）

五十嵐太郎：（笑）そうですね。出展したいと思う動機になるような、勤が良い人ばかりだといいのですが。また同じ人が公募に何度も挑戦できるかどうか。つまり、1回出して落選すると、もうこの舞台とは縁がないと考え、もう応募しなくなる可能性が高い。仮に2度、3度、落選を続けると、さすがに応募する意欲を失う。そうなると、公募を継続すると、だんだん候補者が減っていく。だから今回、僕は「デザインの上手さだけで選んだんじゃない」ということを、結構しつこく書いているのは、落ちた人にそう思ってもらいたくて。当人が読むかどうか分からないですが、これから応募する人にも理解してもらいたい。そして毎年、選考を担当する審査員がひとりですからね。人が変われば、見方も変わり、選ばれるラインナップも違うはずですね。

吉村：公募だけが必ずしも門戸を開く事になっていないかもしれませんね。本来「出すべき人」や「出てきてほしい人」に届き切っていないのかもしれない。

石上：最初に立ち戻っても良い時期なのかもしれませんね。

平沼：当時のように僕らより世代上の建築家たちに「おもしろい人いないですか？」って聞いてみましょうか？（笑）

吉村：それもまた面白いかもしれないけどね（笑）、でも先ずはここにいる約10人が、1名ずつ出展候補者を持ち寄り勝手に推薦する。







石上：被りそうだけど（笑）、おもしろい。

平沼：いいですね（笑） 恐らく完全公募型の審査をされた石上さんも、昨年の五十嵐淳さんも、そして今年の五十嵐太郎さんも気付き始めていると思うのですが、公平性を高めた公募だけだと、駄目かなと、この分野はあらためて感じます。

芦澤：なるほど。他薦と自薦を混ぜるのもいいかもしれませんね。

谷尻：確か、今年のグッドデザイン賞は、そうだったように思います。

五十嵐太郎：そうそう、グッドデザイン賞。基本的には自薦だけだと、それだけだと、クオリティの確保が難しい。出ているべき作品がなかったりする。今年は僕が建築のユニット長だったので、審査員たちが積極的にいろいろな作品を推薦し、底上げを図りました。

谷尻：そこにおられたのですね（笑）

吉村：（笑）公募に対して斜に構えている人たちがいると思うのです。自薦で応募してまで参加しなくても良いか、と思うタイプ。でも「出ておいでよ」って声を掛けてあげれば、良い仕事する人たちがいるんだと思うのです。

平沼：それは明らかな指名をした方が良いですか？

吉村：ここにいる約10名の他薦くらいにして、持ち寄り選ぶ程でいかがですか。

平沼：自薦による公募枠と、他薦による審査員推薦枠、そしてゴールドメダル賞を与えたシード権による指名枠。この3枠による出展候補者の選定。

倉方：いいですね。

五十嵐淳：そうそう、建築家の登竜門と題した若手の発掘は、応募数や推薦者だけの問題じゃないと思いますからね。

吉村：35歳以下の建築家志願者が、この数年に応募してきた彼らしかいないって事はないですよね？

平沼：U30からU35に応募資格を上げたのが2014年です。つまりU30の開催をはじめた5年目ですから、応募の最高年齢付近は、同じ世代となります。でもU30の頃は独立の年齢に至っていなかったことを感じています。開催2年目の2011年にはじめたのが、他薦というものでした。関西なら吉井さんや、関東なら塚本さんのような、若い世代の育成に熱心な方たちに推薦をもらい、横長の図録で掲載していました。掲載されなかったけれど、たくさんの方たちの名前が上がっていたことを覚えています。いわゆる未だ建築家のアトリエに在籍したり、企業のインハウス設計者として活動しながら、夜な夜なコンペに挑戦し、入賞を果たされたりする人たちです。この方たちが今はもう、独立をされはじめたという噂は聞きます。

五十嵐太郎：確かに。出展者だけでなく、U-30世代の候補者を紹介するような推薦文もありましたよね。でもどうして公募による募集だけになっていったのですか。

平沼：現在は途切れてしまいましたが、展覧会の開催費を集めるため行政の負担金や公の助成を申し込む際に、出展者の公平性を問われてしまう経緯が幾つかありました。公募と示しながら内々で決定する方法もきっとあったのですが、若い人たちを対象にした公募だっただけに、汚すのもどうしたものかと、そのまま正直に完全公募へとシフトしていきました。

谷尻：ああ、そっちの問題。

五十嵐淳：そうだったのですね。

倉方：なるほど。

平沼：1度だけの開催なら勢いでできてしまうこともあるのですが（笑）、継続した開催を試みると反省点や改善点も見えてくる一方で、総体的な費用となり開催費に困りはじめます。継続か中断などと悩む内に、行政による後援負担金や公的助併用を民間企業の支援と共に募り始めました。つ

まり開催 2 年目の 2011 年～ 14 年は、自薦である公募を半分、他薦である推薦を半分の出展者を決めていきました。でもまあこんな曖昧なやり方をいつまでも許してくれませんね。そしてついに 2014 年の開催が終わった時に、辺鄙な場所でしたが、まだ緩やかな開催場所でもあった開催地を失うことになりました。絶望的でした。(笑)

一同：(大笑)

平沼：それから本気で奮闘し始めるのですね。その時に、どうせ制限を持たされるのならと、利便性の良い場所での開催を望みました。そしてこの大阪駅前で開催する際に、完全公募による出展者の公募を開始することになりました。「平沼さん、地方都市を代表する大阪の 1 等地で開催する意味はお分かりでしょうね。」なんて脅されながら…。(笑)

谷尻：(笑) いろいろな状況の変遷を経て、公になるうちにこうなっている訳ですね。

平沼：いやでも、それでも建築展なんて、箱や場所ありきではないですから、内容…つまりは出展者の質が高まらないと、開催の意味がありません。近年は毎年、ここにおられる五十嵐太郎さんや藤本さん、そして伊東さんなどと併走して、行政の資金が途絶えても開催を持続可能なものとするために、助成の申請やスポンサーを募るようになり、安藤さんにも今年、一役、担っていただくようになりました。だからここにいる僕らの世代が今日のようにこの U35 を担当しているのですが、建築界全体の「建築の展覧会」のあり方を探るような模索を続けている感覚です。そのため、この「うめきた」に場所を移した 3 年目の開催で、まだまだ不足はありますが、いわゆる行政からの公金をようやくなくしています。でも昨年までの特別協賛をいただいていた AGC が、建築用ガラスの事業の不振で今年から降りられる状況になり、まだまだ開催は不安定ですが、今、出展者の募り方を元に戻しても良い頃ですし、自薦・公募枠、他薦・推薦枠、シード・指名枠と並行して出展者を決定するやり方もいいかもしれませんね。

石上：なるほどですね。でも近年に出展した人達はまだ若いですから、頭角を十分出し切っていないだけかもしれませんよ。

平田：確かにね。せっかく緻密に積み上げてきた仕組みですから、まだまだ諦めるプログラムではないですよ。もちろんここまで議論してきた内容も十分に理解できるものです。

五十嵐太郎：展覧会そのものを良くする上でも、3 枠にしても良いですね。展覧会をはじめた頃の方が盛り上がっていましたね。(笑)



吉村：だって最初は、30 歳以下でしたよね。だからほぼ同世代に焦点があたっている。U35 になった今、U30 に戻すことや、U40 に上げる案もあるかもしれないけど、当時、石上さんを中心にプログラムの変更をしましたね。

石上：管理建築士の制度の変更から、大学の学部や修士を終えてから実務経験年数を消化して事務所を開設し、実作となる建築を設計し始め、完成したものを作品展示するとなると、ちょうど 30 歳を超えてしまう人が多いように思います。本展が U-30 の頃、事務所やスタッフをもち、完全に独立した人が少なかったように思います。ちょうどこの年齢のボーダーラインを超えた付近に立つ人たちを入れる為に、35 歳以下かな、と思って年齢を上げました。

倉方：そうですね。僕も U-35 が時代的にもちょうど良い気がします。30 歳だと今では確かにちょっと厳しいかもしれませんが。でも U-40 では遅すぎる気もします。現代でも何かがある人は、35 歳くらいまでに見えてくるのじゃないでしょうか。

——— それでは当面の間は、応募条件をこのまま、U35 (35 歳以下) とし、1 自薦・公募枠、2 他薦・推薦枠、3 シード・指名枠との 3 枠でします。

—— さて、私たちを取り巻く環境の変化があります。建築界を引率されていた、建築文化や SD など代表される建築雑誌の休刊がはじまって、10 年近くとなりました。台頭してきたネットメディアも、当時、流行したホームページやブログといったものから、SNS を通じて知る無探索の情報率が高くなる中で、どこで知られることになるのか予測できない状態がはじまっているようです。そんな中、建築を知る上での発表のあり方が変化していくようにも感じています。昨年の GOLD MEDAL 受賞者の酒井氏が発言していたように、「既知的に名のある場合と若手の無名では、この時代こそ大きな差となる」とさえ、言われています。つまり評定のある雑誌のようなメディアが一般者の多くにみられなくなって、専門者でも建築雑誌を読む設計者が減っているように思います。本日のシンポジウムでも触れられていましたが、良い建築の基準のようなものが、一定でない価値であるようになってきています。それを乗り越えたここにおられる出展者よりひと世代上の建築家の皆さまから、これからの若手へアドバイスをいただけないでしょうか。

谷尻：若い人たちを中心に僕ら現代で活動する人も含めて、発信の方法を既存メディアに頼らなくなっているのは事実としてありますね。「自分たちがメディアになる時代だ」という価値観が根付いてきていると思います。あらゆる SNS が浸透しているがゆえに、これからパソコン離れをしていくでしょうし、そうなっていった時の在り方は、こちら側もある程度、変わらないといけなかもしれません。今日のシンポジウムで平田さんが仰っていましたが、これまでの建築家である作家性も違う価値観になりうる可能性もあるってことですね。つまり僕らが学び信じた、従来の建築家のやり方とか建築家像みたいなことを示し、伝え続けていくことも大切ですが、その一方で、押し付けてしまうこと自体が、彼らにとっては全く違う価値観で評価されることになる。良いとか悪いとかではなく、僕らもそれを考えないといけないとも思いました。



五十嵐淳：人によりけりだよ。(笑)

平田：(笑) まあそうでしょうけどね。でも建築をモノとしてだけみた場合、昨年の伊東賞を獲っていることからでも明かされていますが、一番レベルが高いなって思ったのは前嶋くんの出展作だった。ただ「何がおもしろい？」って問われると、そのレベルはきっと低くて、彼が話していることもおもしろくなくて、でもモノはいいんだと思うんだけど。(笑) 最終的には、これが選ばれるのがどういう意味を持つのか？ということが分からなかったんです。

谷尻：発掘しようとしたってことですか？

平田：発掘というより、ナノメートルのモノも、斎藤くんのモノも「ある新しさに向かっていこうとしている」ことのみ、評価ができるようなことでしょうか。でもがんばって考えてみたのですが、ナノメートルは、現時点の実作評価としては椅子ぐらいしかなくて…。

一同：(笑) そうですね。

平田：(笑) そう。それって作品という意味ではどこにも見当たらない。それこそ両極端ですが、モノに集中して結果として建物を耐震補強のデザインで作品を残した三井くんとは、逆説のようなことをやっている。彼なんかは今日のシンポジウムで、良い線で進めたっていう結果をみても、良くやったな、と感心しています。

五十嵐太郎：出展者の選考をしている段階から、今日、皆さんから、もっとボコボコに叩かれるんじゃないかと思っていました。(笑)

平田：逆に建築が舐められ過ぎていて。話しにならないと諦めたことも事実ですね。(笑)

谷尻：三井くん以外、モノづくりよりも、場のづくり方ばかりに寄ってしまっていますね。

平田：そう、でもね。建築っていうのも、何が建築かって、よく分からない時もありますよね。何か結びつけるシステムも建築な訳ですし。とはいえ、最後はモノとか空間とか、そういう所に行くと思っているのがきっとここにいる僕らの考えなのですが、その考えを「かなり部分のところをずらしてくれる」U-35 のちょっとした予想外の主張がある。でもナノメートルですらも、ほとんど僕らの想定内の範囲でやってしまっていることが否めない。

五十嵐太郎：ナノメートルのプロジェクトが発展し、いろいろな建築がリアルに動きだしたら、そのひとつを前嶋くんができれば、いいバランスじゃないですか。



平田：最後、持ってっちゃったっていう風に？（笑）。

一同：（笑）

吉村：時代もプログラムも違い、建築を取り巻く環境が違うから、比較をしてしまうのはよくないから参考だけど、僕らの世代は雑誌の休刊以前だったから若手には、建築家への登竜門的な存在だった、SD レビューが中心にありましたね。当時の SD は作品ベースのコンテストですから、モノを選ぶじゃないですか。そして当時の僕らは、モノだけにエネルギーを注ぎ込むことに違和感がなく、小さなプロジェクトに猛烈なエネルギーをかけて、1 作に巨大な模型をつくったりしていました。そして入選すると小さな展覧会が付いてきた。つまり結果として1 発屋でよかった訳です。（笑）でも U35 は、これまでの出展者たちを振り返ると、活躍をされている人が多いことに驚かされます。展覧会の出展者という狭い建築界だけの発表ではなく、広い社会への発表者を募るために、これまでの作品を含めたポートフォリオと、出展作で応募する。つまり1 作品だけではなくて、当時の趣旨どおりに、建築家になりうる人を選ぶコンペになりつつある。本来、わかり易くするには、プレゼンテーションをした経験も少ないだろうし、壇上で議論したことなんてないだろうから、シンポジウムでの発言や発表を控えさせてあげて、SD と同じように応募条件を1 作に絞ってあげれば、彼らはもうちょっとモノの力を発揮するんだと思うのですが、会ってみると違和感をもつ異なった建築家像のように、僕らは思ってしまう。1 発の作品評価ではない分、建築家としての考えの浅さや迷いも同時に顕在化して、セルフ・プロモーションが下手な人たちだっという印象を受けてしまうのも否めませんね。

谷尻：あらためて見直すと、公共のプロポーザルみたいな雰囲気近づいていく感じがしますね。

平田：確かに。だから「別に君の話は聞きたくないよ」と思うシーンあったりするんですね。

一同：うんうん。

平田：作品を通じた作家として、粒だった感じが出た方がおもしろいのですが、作品とは違った観点で「僕はこちらなんだ」という事を主張してくる。まあ自分でも迷っているんだろうけど、ちょっと聞くに堪えないような時がありますね。（笑）つまり作品を通じての主張と、こうありたいという希望的な観測から発言してしまう区別がついてない。つまり壇上で立ちながら、セルフ・プロデュースしているという感じを受けますよね。応募時点の選考基準となる提出したマテリアルは、展覧会に対しての出展作品が軸だと思うのですが、展覧会の展示を結果としてみたときに、「これで勝負する」という気迫のようなものを、あまり感じないんですね。もちろん展示と発表の2 つに、ソコソ

コがんばろうとしていることは感じますが、出展作に投げればいい集中力を、自分自身の考えとして整理できずにいる。このセルフ・プロデュースが邪魔して、結果2 つに分散され、共通する根源的な部分にフォーカスができていない。

石上：壇上の議論がちょっと拡散しすぎて、まとめ切れていませんか。時間が少ないのでしょうか？

平沼：もうちょっと長くやりますか（笑）

石上：（笑）わあ。わからないけど、今は、コンペっぽくはないですね。雑談のような緩やかな議論をして、それぞれが意図を発言する。この内容から審査委員長が最後にアワードの受賞者を決め、発表する程度です。特に何かまとまった題目がある訳じゃない。ある効果や価値をもたらすアワードを授与するのなら、コンペ的な形式を踏んでいくのはどうでしょうか。例えば、審査官のような僕らがいて、質疑を出し応答してもらおう。今はちょっとボンヤリしていませんか。

平田：各出展者のプレゼンテーションが長いのですかね。各自何分くらいで発表されていますか？

平沼：5 分程度です。もともと U30-35 はアワードを設定していなかったのですが、一昨年、藤本さんが審査委員長を務めた時から発足して、昨年、五十嵐淳さんが審査委員長の時に始めて授与されました。伊東さんからの伊東賞も、昨年から始めてです。このアワードを与えることを設定したきっかけは、シンポジウム開催の目的を明確化するためと、開催を盛り上げようと、石上さんが審査委員長を務められた前年の2014年シンポジウム開催の後、打ち上げ会場で、五十嵐太郎さんがアワードの議題発案から、今日のように藤本さんと石上さん、五十嵐淳さんと僕の5人で話しましたね。（笑）もともと南港で開催をしていた頃は、昼の2時半スタートで終わりが8時半。ここにいる半数の





世代上と若手が、向き合い、6時間も議論をやっていたことになり。覚えている方も居られると思いますが、皆さんクタクタになって。(笑) その当時は皆が若かったこともありますかね。もちろん僕らが学んだ当時の厳しい意見も交わされる中、でも世代間で向き合った対談は、僕はおもしろかったなという印象があるんですが、聴講にこられた方からは、相当厳しくも聞こえられて、聞くに堪えないという意見も起こりはじめました。そして時代の影響も受けながら、もう少し全体での議論を進める形で開催をしていこうということになり、今日のような出展者を挟む座席順であったり、観客側に向けて聴講に来られた会場と共有したり、時間を4時間に凝縮したり、微調整を繰り返しながら現在に至ります。もちろん当時のくっきりとした発言に比べると、緩やかに、ボンヤリ、ってというような状態になっていますが、これもまた、元のように戻すことも可能ですね。

平田：なるほどやっぱり相当な経緯があるんですね。例えばですが、一人一人に発表してもらい、皆で批評していくっていうのを、一個一個やるっていうのはありますか？

平沼：もちろんあります。少しですが時代も違いますし、開催場所も異なります。出展者の意識や僕らの年齢も変わってきて、それこそ今日、ここで決めた内容で、来年トライアルしてみることは、いいことのように思っていますし、ダメだったり失敗すれば、僕が代表して謝り、また議論し改善すればよいことです。(笑) それよりも、意義のあるよい開催にしていきたい。

平田：(笑) それは講評会のように、本当に生々しく、審査会を公開するっていうことになりませんか。今日のようにまとめた発言をするとすると、ある程度のところで、結論や核心に迫らないから、

ボンヤリしちゃうので…。僕はこれが良いと思う、といったハッキリとした議論に近づく。

平沼：それを恐る恐る言いますと、それはもう公開審査会ですよ。(笑) 前半の出展者のプレゼンテーション時に、ここにいる皆さんで壇上に登り、質疑応答をはじめ。発表〇分・質疑応答〇分と設定をする。そしてその後に、ここにいるみんなで議論をして、出展者たちは客席側か壇上端でドキドキ聴講しながら要所で質問に答えるような、本気の実施コンペ形式ですか？

平田：そう。そしてそんなに長いプレゼン時間はいらぬですね。展覧会会場でも、こっちが親切すぎて、丁寧に説明を聞いてしまうじゃないですか。

吉村：うんうん。聞いてあげてしまっていますね。そのような前提があると、核心に迫る説明が聞けるのかもしれない。

平田：そう。「これだけで分らせるんだ！」という気迫みたいなものを減じていますよね。ここにいる僕らの世代の人なら、そういうメンタリティーだけど、もしかすると彼らは逆でやる気をなくす可能性もありますか？

石上：どうせ聴いてくれないって？(笑) でも出展された意欲のある人だと信じてみれば、今日でも、ほとんど言及されなかった人もいる訳じゃないですか。それほど辛いものはないようにも思います。

芦澤：建築メディアの見方やメディア発信の仕方がそもそも違うだろうから、この展覧会自体も彼らがどのように位置づけているのかっていうところでしょう。展覧会に出展する意義や後に訪れる意味のようなものを、どこまで捉えているのでしょうか。実はそれは分かっている、そこに価値を見出せないのか。それであればもうちょっと、若い世代がもつフォーマットに則らない、自由な表現ができる。そういう展覧会のあり方を探れるのかもしれないね。

倉方：何を価値基準にするのか分からなくなる時がありますよね。作品そのものなのか、出展作の内容なのか、あるいはディスカッションから出てくるその人の考え方なのか。もしくは3つの全てにフォーカスするのか、何に重点を置いて審査をするのか。そして出展者に発言させるか、させないことも含めて、次のシンポジウムに向けて、考えたほうが良いかもしれません。一旦プレゼンしたら質疑応答程度のみで、それ以降は事実確認のみをするとか。

平沼：一度次回、平田さんが言われた方法で決めて開催してみませんか。きっと僕らもひとつに決めることをよしとしていないから、このようなシンポジウムを連続で毎年、開催している意図がありますね。明らかに用意されている基準を示され、それによった点数評価をしているわけではあ



りませんよね。

五十嵐淳：そう。今年や昨年もそうだったけれど、近年、刺激が少ないんですよ。(笑) ここから何を膨らませられるという要素が少ないじゃないですか。僕らが推薦をして、おもしろそうな人を出展させて、話を聞いて議論する方が、出展する側もきっとおもしろいだろうし、僕らにとってもプラスになりませんか。

倉方：私たちに共通しているのは、新しい才能に出会いたいという強い思いでしょう。そんなモチベーションが、新人として存在を明かしたいと密かに思っている応募者、その瞬間を目にしたいという来場者と一致することが最重要です。自薦である公募枠と、私たちからの推薦枠を並列させるのも一つの手ですね。

平田：そして微細な調整をしながら、このままずっと変わらないというのも特徴になるのかもしれませんが。いろんな仕組みの部分変更を重ねたとしても、人は、また別の結び目を見つける訳ですね。「ここにいる、この人たちが選んできた」というものがあるから、これが大きな接点になるんじゃないでしょうか。これがひとつの独自性ですね。

谷尻：周辺や環境が変わることによって、変わらないことがくっきりと顕在化しますね。

倉方：仕組みを少し変えて調整しても、一貫性があることですね。本展では「ここにいる、やる人が変わらない」ということ。そしてここにいる皆さんの活躍という影響力にも依るものですが。(笑)

一同：(大笑)

—— それでは 2018 年 10 月開催のシンポジウム I (A45) では、出展者のプレゼン発表による講評と審査方式により開催します。本日の最後になりましたが、2018 年の出展者選考による審査を、平田晃久様をお願いをさせていただいております。そしてこの内容が掲載される書籍(図録)が出版されている頃には、出展者も決まり、出展作品も掲載されている時期であることを前提にお知らせして、平田さんが現時点で感じられる建築の評価とは、比較以外ではどのようなものでしょうか。

平田：…難しいな。(笑) …でも僕がみたいと思うのは、こういう建築のやり方があったんだけ気づかされるような驚きです。これに尽きる。もし、そういうのに触れられたら、悔しいんだけどなくて興奮します。若くっても建築の場合は、同じフィールドだから、負けたかもしれない？と思う感覚ですよ。



谷尻：嫉妬させて欲しい？

平田：そう。やっぱりその驚きがあるかないかなんです。でもあまり無いのに、どうやって面白って言ったら良いのか？みたいな事を考えなきゃいけないって、正直、辛いものがあります。

五十嵐太郎：確かに。それを自薦である公募だけで募るのが難しかったということですね。

石上：そうですね。この本って売れていますか？(笑)

平沼：売っていますよ！なんていえないでしょうね。(笑) 著名建築家の作品集でもなく、無名の若手、それも地方開催の展覧会図録ですから、僕らを含めた建築家や新人を知る、いうなれば小さな同人誌のような本です。そもそも展覧会の開催をはじめた当初、出展された記録くらいは残してあげたいと思って作りはじめました。出展者と一緒になりながら、シルク版を手漉ぎで刷ったりして。最近では出版コードまで取得して、開催よりも相当早い時期に、全国の建築専門書コーナーに置き、展覧会開催のPR用の役割を担っているようです。今年の場合だと第1版3500冊だと聞いています。毎年、今日のようなシンポジウムで、図録を基に議論していたり、藤本さんやここにいる皆さんが、買ってあげてください、とお願いされることから、入場されたほとんどの方たちが手元に持たれていて今日も300冊程度。ここに掲載されている出展者やゲスト、当事者である本人たちがPRするのが効果的なんじゃないかな。それでも増刷したのは、これまで数回だけです。毎年、保管用の100冊程を除き、展覧会期間中に購入され役割を終えている程度です。

石上：なるほど。展覧会の図録という限定された数の記録だからかもしれないですが、これも編集長を持ち回り、おもしろくしていくのはどうでしょうか。

吉村：2018年の審査委員長、平田さんから、おもしろい出展者をどうやって集めるかを決めて…図録の責任編集？（笑）

平田：わあ、編集能力が全然ないから…、仕事が消化しません。（笑）

倉方：このような会議が発足すると、話が尽きず、良いですね。そしてそろそろ、プレッシャーが凄いですね。（笑）

平沼：わはは！じゃあこの辺で、ビール行きましょうか。（笑）

一同：はい！（大笑）ありがとうございました。来年もどうぞよろしくお願いします。

—— 皆さま終日にわたり、誠にありがとうございました。展覧会図録の編集については、次年度以降の議題とさせていただいて、終了とさせていただきます。

本日は、展覧会会場にての視察にはじまり、4時間余りのシンポジウムの後、本日の会議の場をご参加下さり、貴重なご意見をいただき感謝しています。本日の議論の内容は、急遽、フランスに出張された藤本さんにも共有するためお送りし、本展の開催を楽しみにしています。



U-35 シンポジウム会場 上階・ナレッジサロンにて